「隠逸の山水」展によせて

山水画に見られる訪友

本展覧会でテーマとして取り上げる山水画には、胸中にある理想の風景が描かれています。その風景のなかには人物が小さく描き込まれる場合が多く、これを点景人物と呼びます。描かれた人物の大きさとの比較によって自然の雄大さを感じられる仕掛けですが、人物に作者や鑑賞者の姿が仮託されていると見れば、鑑賞者を画中へと誘う存在ともなり得ます。世間や日常の抑圧から解放されて自然のなかに遊ぶことや、人里離れた静かな場所で生活を営むことへの憧れが画中に投影されており、観瀑や探梅といった詩情にあふれた行為にいそしむ高士の姿や、水辺にたたずむ庵から水景を眺める文人の姿が見られます。とはいえ隠逸とは、世間とかかわらずに他人との交流を断つことばかりを指すわけではありません。隠逸と近い言葉である隠遁の場合には、中国の文人たちにとって心から山水を楽しむことを指す言葉だったようです（小尾郊一『中国の隠遁思想―陶淵明の心の軌跡』中央公論社、1988年）。そのため、山水のなかでは必ずしもひとりきりにならなければならないというわけでもなく、友の庵を高士が訪ねる“訪友”の様子を多くの山水画に見ることができます。

今回出陳する作品から、そのような場面をいくつかご紹介します。室町時代の周文筆と伝わる「山水図屏風」（大和文華館蔵）には、霧の出る深い山中を歩く人物が描かれています（図1）。人物の向かっている方向には、霧と木立の間から建物の屋根や門がのぞいています。また、用いられた筆法から桃山時代の巨匠・狩野永徳の描いた作品である可能性が指摘されている「四季山水図屏風」左隻（香雪美術館蔵）でも、第二扇には水辺の建物から外を眺める人物（図2）、第三扇には小舟でその建物に向かう人物（図3）が描き込まれています。江戸時代の渡辺始興筆「金地山水図屏風」（大和文華館蔵）では、杖を携えて侍者を連れて道行く人物の姿が左右隻ともに見られるほか、右隻第四扇の水亭では二人の人物が語らっています（図4）。これらの作品は時代や作者は異なるものの、文雅を解する友のもとを訪ねて交流する、訪友を明示するモチーフとして点景人物が描き込まれていることは共通しています。

一方で、人物が全く描き込まれていなくとも訪友を想起させる作品もあり、山口素絢筆「雪景山水図襖」（京都国立博物館蔵、図5）をそのような作品のひとつと推測しています。作者の山口素絢（1759～1818）は円山応挙（1733～1795）の門人で、美人図を得意とした絵師としてよく知られています。本作は襖四面で構成され、雪の積もった水辺の景観が描かれます。画面向かって右の手前には斜めに交差する二本の松が生え、その奥の方に橋が架かっているのが小さく見えます。向かって左側の中景には垣根で囲まれた建物があり、門前には小舟が浮かんでいます。静謐に満ちた情景にはごく限られたモチーフしか描かれていませんが、雪と小舟からは「剡渓訪戴（えんけいほうたい）」という中国の故事が連想されます。晋の時代の王子猷（おうしゆう）は、ある雪の積もった夜に月が出ていて会稽の剡県に住んでいた戴安道（たいあんどう）が懐かしくなり、舟に乗って安道のもとを訪ねました。

ところが子猷は、門前まで来て急に引き返して帰ってしまったといいます。人になぜ中に入らなかったのか問われると、興が尽きてしまったからだと子猷は答えたという内容で、これを画題とした作品も描かれました。子猷は結局友と会わずして帰ってしまいましたが、興がわいた際に友の存在を思い出して実際に訪ねるというのは訪友を象徴するエピソードのひとつです。「雪景山水図襖」は舟に乗る子猷の姿を描いておらず、剡渓訪戴を主題として明示しているわけではないため、単に物静かな情景の描かれた作品と見ることもできます。しかし、雪の積もった水辺に建つ庵と、門前にとまる小舟のモチーフから、先の故事を背景として連想し、静けさのなかに文人たちの風雅な交友を感じとることもできるのではないでしょうか。

室町時代から江戸時代まで日本で描かれてきた山水画の根底には、隠逸への憧れが息づいていました。騒がしい俗世間から離れた場所で静かに暮らすことへの憧れです。山水画の制作や鑑賞は、ままならない現実社会をひとときを忘れて心を解放する手段のひとつでした。展覧会では、山水画の静かで落ち着いた風情とともに、詩趣に乗じた交流を楽しんでいた文人たちの営みの様子も感じとっていただければ幸いです。

（仁方越洪輝）

図1

図2

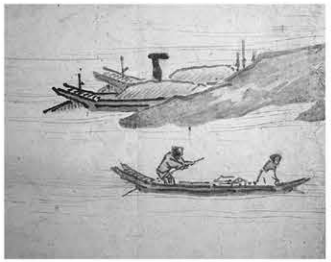

図3

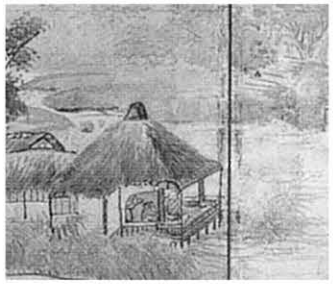

図4

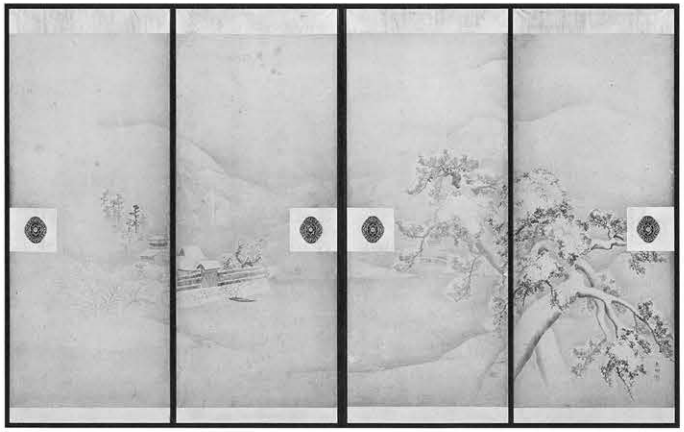

図5

季刊 **美のたより** No.221
令和5年1月6日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.